

『瑜伽師地論』修所成地における「想」の修習法

権 来順

§ 0

初期仏教經典には、仏法の特徴を示した「法印 dharma-uddāna」と表現される「無常・苦・無我」の説示の箇所が多くみられる。阿含・ニカーヤ文献の至るところに、「無常・苦・無我」の「三想」をはじめとし、「五想」「六想」「七想」「九想」「十想」など、支分を増やしたものが法数によって「想 saññā」の修習法として説示される。仏教は「無常・苦・無我」の三特相(三性質)を見極めること(vipassanā 観 ; anupassanā 随観)から確認される智慧(P.paññā, Skt. prajñā ; 般若)によって解脱・涅槃を実現するのが究極の目標とも言えよう。

大乘瑜伽行派の論書である『瑜伽師地論』「修所成地」には、十種の瑜伽の実践修習法として「十想」が説かれている。「修所成地」は、ヨーガ行者の修行の段階(yogācārahūmi)を明かした『瑜伽師地論』本地分 17 地の中、第 12 地に属する。「修所成地」の内容構成の全体像は、①修習の処所、②修習の因縁、③瑜伽の修習、④修習の果という四つの依り処<四処>と、この四つの項目をまた<七支>に分類し、修習のありかたを説いている。

「十想」は、<四処>の第 3 処である「瑜伽の修習」において、「対治を修習する」<七支>の第 5 支の内容となっている。ここでは在家位・出家位・遠離閑居修瑜伽位という三位に分け当てて十種の「想」(p.saññā; skt.samjñā)を観想すべきこと、と論じられている。在家位では不浄想・無常想の 2 想、出家位では苦想・無我想・食厭逆想・一切世間不可樂想の 4 想、遠離閑居修瑜伽位では光明想・離欲想・滅想・死想の 4 想が修習の対象となっている。

ここで説かれた「十想」観法の背景を探るための資料は、四ニカーヤと漢訳四阿含、そしてアビダルマ論書としては、部派別にパーリ上座部、説一切有部、法蔵部のものを検討した。その外の所属不明の阿含經典とアビダルマ論書、また大乘經典と大乘論書に関しては、經典と論書別に分けて検討した。

その結果、「十想」の十の支分が各經典や論書において異なる箇所が多い。「十想」の典型的な支分は、①不浄想(asubha-saññā)、②死想(maraṇa-saññā)、③食厭想(āhare paṭikkūla-saññā)、④一切世間不可樂想(sabbaloke anabhirata-saññā)、⑤無常想(anicca-saññā)、⑥無常苦想(anicce dukkha-saññā)、⑦苦無我想(dukkhe anatta-saññā)、⑧断想(pahāna-saññā)、⑨離貪想(virāga-saññā)、⑩滅盡想(nirodha-saññā)として見受けられる。

ただ、『瑜伽師地論』の「声聞地」や「修所成地」には、他の經論には見当たらない<光明想(āloka-samjñā)>が、断想に入れ替えてある。「声聞地」に 4 種<光明想>が説かれ、これが奢摩他・毘鉢舍那であることを暗示する。

今回の発表は、Aṭṭhakathā、Visuddhimagga などの注釈書や論書から、「十想」の典型的な形態である各支分の意味解釈を探り、どのような背景の基で「声聞地」や「修所成地」に断想の代わりに<光明想>入れ替えてあるのかを究明し、この観法がもつ禅定観法としての具体的な修習法乃至、修習内容とは如何なるかを明かす。

キーワード : 「想」(p.saññā; skt.samjñā)、止(śamatha)、観(vipaśyanā)